



小樽

失われた故郷のように

巖谷 國士 Iwaya Kunio

1943年東京生まれ。東京大学出身。仏文学者・評論家・作家・写真家・明治学院大学名誉教授。シュルレアリスムの研究と実践を軸に、芸術・文化の広い領域にわたって執筆活動を展開。講演や展覧会監修、内外の紀行でも知られ、北海道との縁も深い。著書に『シュルレアリスムとは何か』ほか多数、近著に『澁澤龍彦論コレクション』全5巻。5月26日に小樽文学館で講演。

私には港町に魅^ひかれる傾向がある。それも斜面の多い、坂の上から海を見はるかすことのできるような港町だ。これはおそらく、東京でも地名どおりの港区にある高輪^{たかなわ}という町で生まれ、いつも坂道を歩いて育ったからでもあろう。いまではその高輪も海岸を埋め立てられ、坂上からの眺めは高層ビルの列に変わってしまったけれども、夢にはまだ海の遠景があらわれたりする。そのせいだろうか、港に向って降りてゆく坂の多い町にやってくると、ふと懐かしい気分におそわれることがある。

小樽はそんな町のひとつだ。北海道では函館もそうで、こちらについてもいずれ書きたいと思っているが、その函館がかつて小さな火山島だった特殊な地形の町であるのに対して、小樽のほうは西に小高い山々、東に海というほぼスタンダードな地形の港湾都市で、私の故郷・高輪に似たところがある。実際、はじめて着いて浅草通りをまっすぐにくだっていったとき、ある種の郷愁をおぼえたものだった。

町のよびおこすノスタルジア。ただしそれは私の個人的事情だけで説明できるものではなかった。なにかもっと普遍的な、だれにでもあったはずなのにもう失われてしまっているような、共通の過去の時へとさかのぼる懐かしさ——それをこそ、ノスタルジアと呼ぶ

べきではないだろうか。

ゆるやかな坂をくだるにつれて、さまざまな古い建物があらわれる。右手には、かつて北海道最大の金融都市だった小樽の象徴のような旧・日本銀行小樽支店。この巨大な石造建築は1912／明治45年竣工、東京の日本銀行本店や東京駅とおなじ辰野金吾の設計で、そのこと自体の懐かしさもあるが、国家を背負った威圧感が漂い、私にはさほど魅力的ではない。だがその先の旧・北海道銀行本店（1912年）、旧・第一銀行支店（1924／大正13年）、旧・北海道拓殖銀行支店（1923年）あたりまで行くと、明治・大正の各時期の建築様式を反映する個性があって、なにやら不思議な過去へと沈んでゆくような気がしてくる。

そのままくだって小樽運河に出てもいいが、左折して色内大通りに入ると、旧・三井銀行（1927／昭和2年）や旧・商工会議所（1933年）、旧・四十七銀行（1936年）、旧・安田銀行（1930年）など、昭和初期の建物が多くなる。とくに目をひくのは1931年完成の旧・越中屋ホテルだろう。直線的なデザインの4階建て、倉澤國治設計。中央に2列のガラス張りのベイウィンドウをもつこの建物は、外国人用のホテルだったもので、北海道どころか列島に稀なアール・デコ様式をとりいれ、独特の北方モダニズムを表出している。

小樽の古い建造物について語りだせば切りがなくなる。ただ、戦前の銀行などの建築がつぎつぎとあらわれるこの色内地区だけでも、こんにちの小樽の特異な雰囲気を説明できるだろう。ひとつには、これらの堅固でハイカラな古い建物が現在ではほとんど別の用途に使われているか、それとも放置されているかであり、どれもどことなく寂しい、空虚な感じを与えるということである。つまりかつての活気を失って、いまは静かに余生を送っているといったような。

昭和初期の小樽は貿易や金融によって栄え、札幌よりも人口の多い都会だった。外国人もよく訪れたし、世界中の物品の集まる商都だった。そんな栄華の時が去って久しい。だからこそ寂しくて懐かしい。だからこそ美しい。最近では産業がふるわず、人口も年々減ってゆく一方で、観光客が年々増えている。歴史の長さも厚みも違うけれど、近代になって成長を停めてしまった西欧の大観光都市、たとえばヴェネツィアやブリュージュとさえ似た部分がある。

私自身は十代なかばに高輪を去り、いまは同じ東京でも世田谷区に住んでいるが、小樽へ行くともうひとつの故郷を感じる。もうひとつの高輪ではない。なにか失われた時間のような空間のような、他の人々とも共有できるかもしれない故郷なのである。

カフェ「光」ですごす夜

小樽は夜も美しい。1970年代には小樽発・根室行という鈍行の夜行列車があり、何度かそれに乗って道東へ旅立ったものだが、夜中の発車までは町をさまよるのがならいだった。運河のあたりでも、最近のようにそれらしい街灯や「ライトアップ」の演出があったわ

けではなく、暗く侘しい風情だったが、その^{すた}廃れた感じがまたよかった。駅に近い通りには小店や屋台も出ていて、小樽ではじめて出会った「ザンギ」や「カルパス」や「ぱんじゅう」を食べたりした。

かならず立ち寄ったのは都通りの有名なカフェ「光」である。1933／昭和8年開業という店だから、古きよき時代の小樽を記憶している。レンガ造の地味な建物で、入ると店内は別世界、というか、昭和モダニズムの余生を思わせる空間だ。失われた栄華のイメージをとどめ、時間がもうとまってしまっているかのような、小樽にしかない休息所、あるいは避難所というべきところかもしれない。

ほんやり滲むブラケットの照明を受けて、あちこちに並ぶオブジェたちが「光」を映し、骨董の森の夕刻といった雰囲気をかもしている。アンティーク・ランプや柱時計、船の模型や円形舵などのコレクションはどれも異国の由来らしい。英・仏・露、それに中国のもありそう。かつてボードレルの詩の「旅への誘い」を表現していたオランダの港町のイメージも重なってくる。

席に着くと、テーブル脇のガラスケースのなかにも、骨董ランプのコレクションが整列している。店員の女性も昔風で感じがよく、「マニュアル」などではない自然な応対をする。古びたノリタケ・チャイナのカップで出されるコーヒーが旨い。受け皿にはクッキーのようなカステラのような、小さな焼き菓子が添えてあって、その製法も戦前のままらしく、懐かしい昭和初期の味がする。

その一杯だけで閉店まで、のんびり・ほんやりとすごす。そういう小樽にしかない時間を、私は毎回くりかえしていたように思う。

当時はもっぱら列車と船の旅だった。飛行機を使う発想はなく、上野から夜行列車で青森へ、青森から青函連絡船で函館へ、函館から函館本線で小樽へと、最短でも2日間かけて到着した。まだ元気だった函館本線に乗り、^{おしゃまんべ}長万部でわかれて^{くっちゃん}ニセコ・倶知安や余市を経由して、5時間弱で小樽に着き、さらに札幌まで走



色内大通りにある旧・越中屋ホテル（1931年建造） 撮影：筆者

る本来の路線なのだが、苫小牧経由で行くよりも早かったと記憶する。私はたいてい小樽で降りてしばらく滞在したので、80年代までは札幌よりも小樽のほうがなじみだった。

その後は飛行機が便利になり、仕事の都合もあって拠点は札幌に移っている。1993年に『日本の不思議な宿』という著書の取材のために逗留して以来、しばらく小樽にはごぶさたしていたものだが、ようやく東日本大震災後の2013年初夏、訪問のチャンスが訪れたのだった。

瀧口修造と小樽文学館

市立小樽文学館でひらかれた「詩人と美術 瀧口修造のシュルレアリスム」展の折に、図録の長い序論を書き、同じテーマで講演も引きうけることになったからで、十年ぶりのこの好機がことのほか嬉しかった。

前記の『日本の不思議な宿』に書いてあるとおり、瀧口修造（1903-79）という詩人・美術家・批評家は小樽に浅からぬ縁がある。生まれたのは富山だが早くに両親を失い、学生時代から没年まではほとんど東京でくらしていた人だが、慶應義塾に入った1923／大正12年に関東大震災に遭い、いったん停学して姉の住む小樽の家に身を寄せてから2年間、道内の開拓地でくらそうとまで考えていたにもかかわらず、姉に説得されて東京にもどり、それからは戦時下の苦難にも耐えて、76歳で亡くなるまで、稀に見る尖鋭で自由に美しい執筆・制作活動をつづけた。

小樽はその遠い出発点であり、彼にとって第二の故郷ともいえるような土地だったのである。

私は20歳でその瀧口修造と出会い、40歳年少の友として長い親密な交遊の時を得ていたので、小樽にはその意味での関心もあった。1993年の旅はまさにそれがきっかけだったが、こんどはいつそう具に瀧口修造の「小樽」を追体験してみたいところだった。

講演の前にカフェ「光」で懐かしい一刻をすごしてから、会場へ向ったときには胸がわくわくした。小樽文学館はあの日本銀行支店の斜め前にあり、戦後の



1952／昭和27年の竣工なのでさほど古くはないが、すっきりした広い窓をもつ3階建ての建物で、どこか戦前の国際モダニズムに通じる印象がある。プレートを見ると元「小樽地方郵金局」だったとわかる。そこへ1978年に市立文学館が、翌年に市立美術館が入ったのである。

市立の文学館というのはめずらしいが、それが美術館とつながっているのもめずらしい。詩人であり美術批評家であり、みずからデカルコマニーや水彩なども描いてもいた瀧口修造には、まさにぴったりの展覧会場ではなからうか。

窓から通りの見える階段をあがるとすぐ、昔の喫茶店を模したコーナーがあった。店名は「夢」とされていて、看板にはモダンな文字で「アナタは夢のもの／夢はアナタのもの」とある。館長によればこの「夢」こそは、あの「光」の前身だった店なのだという。

古拙のシャンデリアがさがり、カウンターに大きな木のテーブル、布張りのソファ、ピアノが置かれ、壁にはトカゲの剥製のとりついているこの遊びのある空間は、昭和初期の文学者たちのカフェ生活を思いうかばせる。小林多喜二や伊藤整も、もしかしたら瀧口修造も、「夢」ないし「光」に出入りしていたかもしれない。

そんな夢を誘う風情が小樽の町にはあるということ、この文学館は先刻承知のようだった。

「島屋」から蘭島海岸へ、手宮洞窟へ

展覧会そのものは予想どおりの出来ばえで、小樽ならではの展示もあった。たとえば奥の一角に再現されている戦前の「島屋」、つまり小樽に実在した商店の

インスタレーションが目をひく。想像によって仮設された空間だとしても、大正末以後の小樽と、青年・瀧口修造の生活とを思いおこす縁になっていた。

「鳥屋」とは、花園の小樽女学校（現・菁園中学校）の前に、瀧口修造の姉の鳥みさをがひらいた小さな文房具・手芸材料店であり、修造は一時その店の手伝いをしていた。当時の体験がのちの詩人に何かを残したことはまちがいない。少年期からこの姉を思慕していた修造は、同じひとつの店でともに働いた日々のあと、だが彼女の懇願に負けて帰京・復学を決意することになる。

こうして北海道での新生活の夢を捨て、大学英文科に進んで再出発したとき、たまたま英国留学から帰ってきた教授の詩人・西脇順三郎と出会ったことから、思いがけない未来が扉をひらいた。この先人の持ち帰っていた資料、とくに西欧のシュルレアリスム運動の斬新で過激な書物に惹かれて、瀧口修造は独力でフランス語を習得し、やがて日本を代表するシュルレアリスムの紹介者・体现者となってゆく。

それでも小樽との縁が切れたわけではない。その後も何度か小樽を訪れて「鳥屋」の姉を頼り、周辺を旅していた形跡が見える。とくに1927年に郊外の蘭島で夏をすごしたことは、12年後に回想されている。蘭島海岸を語る文章にはつぎのようなくだりがある。

「白骨のような樹の根が打ち揚げられた砂浜で、僕はちょうど現実の漂流物の間に立ちすくんだような気がしていた。」（「ある時代」1939年）

蘭島は小樽の西方にある北海道でも有数の海水浴場で、ちょうど展覧会に出品されていた昭和初期の絵葉書からわかるように、夏には海水浴客で賑わっていたはずだ。そんな砂浜で「白骨」の比喻や「現実の漂流物」を見たという表現は詩的で多義的で、不吉な予感をはらんでいたとも読めるだろう。

やや専門的になるので詳述は控えるが、ここには当時の瀧口修造をとらえていたシュルレアリスム絵画のイメージが重なり、しかも大震災の記憶や、やがてはじまる戦争の予兆も喚びおこされているように思える。

たとえばエルンストやマグリット、タンギーやダリの絵画への連想を誘うだろう。

それはともかく、私は講演の旅の途上、その蘭島海岸にも立ち寄っていた。函館本線で三つ目の駅だが、初夏に降りる人はほとんどなく、防潮堤の向うにひろがる砂浜はどちらかというと殺風景で、あちこちに漂流物がちらばっていた。潮に洗われて不思議なオブジェと化した石、摩滅して穴のあいた貝殻、瓶や紐のような人工物、そして一様に白くなっている流木。はたして白骨に似たのもある。私はそんなオブジェをいくつか拾って持ち帰ることにした。

これらは生命のないものだが、砂浜のところどころにはタンポポが自生し、真っ白な綿毛の球をゆらしている。そしてその背景には、じつに美しく青い、波の静かな忍路湾の海面がひろがっている。右にポンマイ崎、左に畚部岬とその先のシリバ岬。ここは変化にとむ風光に恵まれた快い土地なのだ。かつてどんな人々が住んでいたのだろう。

私はすぐ北にある縄文期の遺跡、余市のフゴッペ洞窟にも行ってみた。2000年近く前の縄文人の描いた壁面線刻画は感動的だった。こうなると小樽にもどり、市中にある手宮洞窟も再訪せずにはいられない。同じところに描かれた線刻画はガラスに隔てられていて見えにくいですが、映像によって明確なフォルムを見なおすことができる。そこに現出している不思議な角のはえた人物の群像こそ、まるでシュルレアリスムではないか。

晩年の瀧口修造と親しく交友していた、あのミロの絵などが連想されてくる。

同種の図像はシベリアの内陸などでも発見されている。もはや近代日本の港町・小樽どころではない。数千年、数千キロの尺度で計られるべき北方の文明と自然が前提にひそんでいる。

失われた故郷という漠たる印象には、そんな遠い前史も反映しているのかもしれない。小樽はやはり、懐かしい町である。

